

# お茶の名産地・静岡に貢献した次郎長親分

静岡県ホームページ 他

現在、お茶というと静岡が有名。  
静岡県は全国の茶栽培面積の約40%、生産量も50%を占める常に  
優位を占め、量的にも品質的にも日本一の茶産地となっている。

一位 静岡県、二位 鹿児島県、三位 三重県。

しかし、江戸時代には静岡ではあまり栽培されていなかった。  
江戸時代、お茶は京都・宇治の特産品だった。

旧暦1月1日から88日目の八十八夜をもって夏の始まりとし、  
八十八夜の茶は不老長寿の茶だと言われていた。  
日本では昔から初物を食べると命が延びるという思想がある。  
旬のものは「命の息吹」が強く、栄養学的にも身体によいことが  
立証されている。

宇治でとれた八十八夜の初づみの茶をすぐ、手もみにしたものを  
壺にいれ東海道を道中し(茶壺道中)、徳川將軍家に献上した。  
江戸時代、茶壺道中が通ると本格的な夏がやってくる知らせであった。



徳川最後の將軍、慶喜は將軍をおり、静岡に戻り隠居した。  
お付の武士は失業。  
多くの武士に仕事を与える為「茶の栽培」をやらせた。  
この時、次郎長(山本長五郎)親分の尽力があり  
今日の隆盛につながっている。

旧幕府側の重臣で、勝海舟と西郷隆盛の会見を実現した陰の  
立て役者、山岡鉄舟は、かねてより顔見知りだった地元の顔役、  
次郎長に命じて、没落武士の仕事を世話させた。

次郎長は、武士たちを農家に振り分けて開墾作業をさせ・・・数多くのお茶畑を作った・・・というワケ。

晩年の次郎長は「自分の親分は山岡鉄舟」と公言していた。  
次郎長一家の墓がある清水市の梅蔭寺(ばいいんじ)には、鉄舟が  
次郎長に贈った書などが展示されている。  
次郎長が亡くなったのは、明治26(1893)年6月12日。74歳だった。